



冬にしみじみと味わうクラシック♪

『アーモンド入りチョコレートのワルツ』 森 絵都

(スタッフ・N)

音楽を読む

2月になり、街がバレンタインのムードにそわそわはじめました。今回はバレンタインにちなんで、タイトルに「チョコレート」が入っている森絵都さん作の短編集『アーモンド入りチョコレートのワルツ』をご紹介します。

物語の主人公は全員中学生。「ピアノの音色は人の心の足りないところを埋めてくれる」(p.64)ということばのとおり、子どもが大人になってゆく過程、その一瞬を切り取った切なくもどこか優しい3つのお話に、シューマン、バッハ、サティのピアノ曲がそと寄り添います。この小説には、大人でも、むしろ大人だからこそ感じるができるものがあるように思います。まだ大人とはいえないけれど、ただの子どもでもない彼らのお話を読んで、何を感じるかは読む人によって違うはず。私たちにも確かにあった「あの頃」を思い出しながら、大切に味わって読んでみてくださいね。



『アーモンド入りチョコレートのワルツ』 森 絵都

出版社:KADOKAWA
請求記号:B913.6f
駅南図書館所蔵あり

ナクソスに
ログインしてアクセス!

物語の中に登場するシューマンの『子供の情景』、バッハの『ゴルトベルク変奏曲』、サティの『短い子供のお話』。どれもピアノの名曲ですね。様々なピアニストの演奏をナクソスでお楽しみください。

クラシックにふれよう

ベートーヴェン 交響曲第5番 八短調 作品67『運命』

(スタッフ・M)

ベートーヴェンの「交響曲第5番・運命」。かの有名なモチーフ、その出だしの音符・音は何か。「ダダダダーン」の“ダ”だから?」・・・正解は「八分休符」。つまり最初の音は“無音”なのだ。「んっ、ダダダダーン」。運命が決する扉の前に一瞬躊躇した後に、肚を決め一叩(いや、四叩?)する。そんな感じだろうか。

“無音”はどのように演奏され得るのか?中野雄さんの『ウィーン・フィル 音と響きの秘密』(文春新書)にあるフルトヴェングラーの逸話が面白い。ウィーン・フィルで長年ヴィオラ・セクション主席を務めた名手ルドルフ・シュトレングからの聞き書き。「彼の指揮棒の先がブルブル震えながら、だんだん上がってゆくて話。『ここ!』っていう力点がないから、オーケストラはどこで、いつはじめてたらいいか解らない」

「そんな時間の経過の中で、フルトヴェングラーが、『いまだ!』と閃く一瞬がある。それを感知したチェロの主席とコントラバスの首席がさっと弓を動かす。それがあの有名な(運命の動機)のはじまりになるわけです。他の指揮者のときとは、音の中味が違う」

絶妙な「んっ」の間(ま)からのビッグ・バンによって運命の扉は開かれる。やったぜフルヴェン!となる。視覚映像からなら体感できるであろうこの「んっ」を、音声情報だけから感じ取ることはできるのか。フルトヴェングラーの名盤の誉れ高い1947年のベルリン・フィルや1954年のウィーン・フィルに耳を傾けてみると、あの「んっ」が私には“聴こえて”くるように思える。もっともそれは先の逸話を知っているからなのかもしれないが。

この珠玉のモチーフの出だしを聴き比べてみるところから「交響曲第5番・運命」に親しんでみるのも、また楽しいのではないかと思う。

ナクソスに
ログインしてアクセス!

1947年のベルリン・フィルと1954年のウィーン・フィルのみならず、他の指揮者、オーケストラの演奏との聞き比べも是非ナクソスでお楽しみください。

ピアノの練習

(スタッフ・O)

音楽とわたし

編集担当のひとこと

遠い昔、何年かピアノ教室に通ったがほとんど練習せず、見放されて怒られもせずフェードアウトしてしまい、全く弾けるようにならなかった。(今となっては少し後悔。ピアノを聴くのは好きなので)時がたち、娘は自らピアノを習いたいと言い出し(七夕にお願いしていた)習い始めた。最初は家で練習に付き合っていたが、全く弾けない母の出番はすぐなくなった。娘は良い先生に恵まれ楽しくレッスンに通い、小学校のクラスの合唱の伴奏をしたりはしたが、(母はハラハラドキドキ)小学校で早々やめてしまいそのままになっていた。さて時がたち娘は社会人となり、また伴奏する機会が訪れ、時折家で練習しているのをかすかに聴いたり、娘の伴奏に合わせて子どもたちが歌っているのを想像するのはなかなかよいものです。



この冬は暖冬といわれ、確かに冬らしからぬ気温の日々でしたが、1月には初雪も降り、北風が冷たく昼間も寒い日が訪れましたね。日々の疲れを癒してくれるクラシック音楽を是非ナクソスでもお楽しみください。